

稲作だより

～第4号 田植え直前編～

健苗の適期・適正な移植でスタートダッシュを!!

ハウス内の温度が高すぎる場合は、換気と遮光資材を活用して温度を下げましょう。

田植えはできるだけ天気の良い日に行い、保温的水管理で活着を促しましょう。

5月9日発表の東北地方の1か月予報（5月11日から6月10日）では、暖かい空気が流れ込みやすいため、向こう1か月の気温は高く、特に期間の前半は、気温がかなり高くなる見込みです。苗の温度管理に十分注意し、健苗を育成しましょう！

1 育苗後半の温度管理 <活着力を高めましょう>

田
な

1.5葉期以降	温度のめやす
昼間	夜間
15～20℃	5℃以上

植え予定日の1週間前からは、降霜や極端低温がない限り、夜間もハウスを開放し、徐々に外気に慣らします。

2 育苗期間中の水管理 <適切なかん水で徒長を回避！>

- かん水は1日1回、朝にたっぷりと行いましょう。一見、乾いているように見えても、夕方に苗の葉先に水滴がついている場合は、夕方にかん水する必要はありません。
 - 朝のかん水後、乾いてさらにかん水しなければならない場合は、昼ごろにかん水を行いましょう。低温時や夕方かん水は、床土の温度を下げ根が酸素不足になり、根張り不良の原因となります。
- ※育苗後半は、苗が水分を多く消費するため、乾きやすくなります。覆土や苗の様子をよく観察して、過乾燥にならなよう適宜かん水を行いましょう。

3 追肥は適期に適量を <1箱あたり窒素1gが基本>

◇苗の種類と追肥時期

苗の種類	追肥時期	施用例
中苗(35日苗)	1回目：2.0葉 2回目：3.0葉	窒素成分 1g/箱を目安に施用します。 例) 液肥2号(窒素成分10%)の原液を100倍に希釈し、箱あたり1ℓ施用します。
稚苗(25日苗)	1.8葉期	

※育苗土に緩効性肥料（中苗一発など）を使用した場合は追肥の必要はありません。

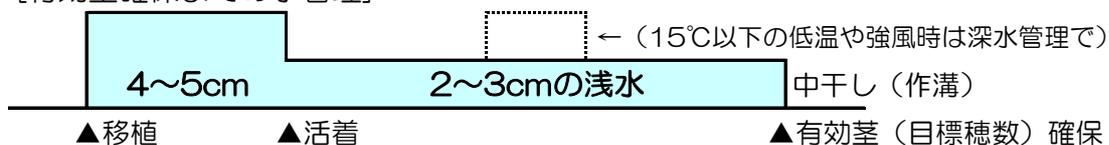
4 田植えのポイント 《適期に適正な栽植密度で植えよう》

- 収量・品質及び食味を安定させる**移植適期は5月15日～25日頃**です。移植時期が遅れると、初期茎数が確保できず収量が減少する例もあります。適期移植で初期茎数を確保しましょう。
- **移植は天気の良い日**に行い、低温や強風による植え傷みを防止しましょう。植え傷みを抑え、速やかな活着を促すことが初期生育の確保に繋がります。
- **栽植密度は21株/㎡（70株/坪程度）、株当たり植込本数4～5本**が標準です。栽植密度が低いと茎数・穂数の不足、1穂粒数過多による登熟不良、玄米タンパクの上昇等につながる場合があります。気象変動に対応するために適正な栽植密度で茎数確保に努めましょう。
- **適正な植え付け深は3cm**程度です。根が露出するような過度な浅植えは、除草剤の薬害が発生しやすくなります。反対に深植えは、初期の分けつの発生を抑制し、根の発達も不十分になります。

5 田植え後の水管理 《活着を促す水管理を行きましょう》

- **移植直後は水深4～5cm**として（風や外気から苗を保護するため）、活着を促します。
- **活着後は2～3cmの浅水**とし、分けつの発生を促します。
- 気温が15℃を下回る低温時や強風の時には、深水とします。

[有効茎確保までの水管理]



- 大切な用水なので、土地改良区等の情報を基に、適期・適正にかん水しましょう。

6 除草剤の適正使用 《使用基準、使用適期を守ろう》

- 効果を高めるとともに、河川への成分流出を防ぐため、散布後7日間は止め水し、田面を露出させないようにします。

※田植同時処理を行う場合には、使用時期に「移植時」の適用がある除草剤を使用します。「移植直後」の適用しかない除草剤は、田植同時処理には使用できないので注意してください。ラベルを確認して使用しましょう！

7 葉いもち対策

- 葉いもちの発生を予防するため、箱施用剤を忘れずに施用しましょう。
- 取置苗は葉いもちの発生源となるため、速やかに撤去しましょう。

☆春の農作業事故防止啓発運動展開中（4月1日～6月10日）
例年、この時期の機械操作中の重大事故が起きています！
あせらず、ゆとりを持って農作業をしましょう。周囲の方にも、声掛けを！

地域ぐるみでSTOP！農作業事故！

【発行】 村山総合支庁北村山農業技術普及課 TEL0237-47-8630, 8631